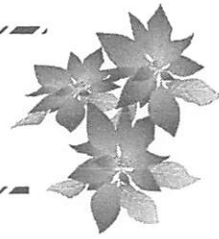


礼拝

令和6年11月18日

4号



成道会(じょうどうえ)

釈尊の教え～怒りなく幸せな人生を～

第二学期の中間考査の結果をもとに、二者面談が進められていると思います。自分の努力や怠り、心の変動などをよく振り返り、学業面だけではなく生活面もあわせてよりよいものへと高めていくってください。

さて、来月八日は、人間の幸せについて考え続けられたお釈迦さまが「お覚(さと)り」を開かれた日で、仏教の三大法会のひとつ成道会であります。

お釈迦さまが率いる仏教教団には、生涯で八万四千人もの弟子がいたと言われているといます。仏教経典には、お釈迦さまがいろいろな

タイプの弟子に教えを説く話が多数収められています。全ての弟子に真理を伝えるため、お釈迦さまは相手のレベルに合わせて、あるときは一般の人には到底理解できないような深い思想を語ったり、またあるときは、まるで別人のように直接的で具体的な内容で對話されたといえます。そうした接し方が、お釈迦さまの弟子を増やしていた理由の一つであったと言えます。

一方で、お釈迦さまの教団をよく思わなかった者に関するお話も残っています。

あるとき異教徒の若者がお釈迦さまのもとに現れ、思いつく限りの悪口を怒鳴るように言いました。何も言わずその悪口を聞いていたお釈迦さまは、若者が悪口を言い終ったとき静かな口調で尋ねられました。「あなたが私にプレゼントを持ってきたのでしょうか。もしそれを私が受け取らなければ、そのプレゼントは誰のものになるのか。」「受け取ってもらえなければ自分が持つて帰るだけだ。」「では私に対して言った悪口を私が受け取らなければ、その悪口は誰のものになるのか。」「いくら受け取らないといっても、与えた以上はおまえのものだ。」「いや、それは与えたとは言えない。悪口に対して悪口で返し、怒りには怒りで応じ、力には力

で返す。これを受け取ったというのであつて、逆に何とも思わなければ、受け取ってもいいし与えられてもいいないということだ。」「いくらひどく言われても腹を立てないお釈迦さまを不思議に感じていた若者に、「智慧ある者に怒りなし。よし吹く風荒くとも、心の中に波立たず。怒りに怒りをもって報いるは、げに愚か者のしわざなり。」と、お釈迦さまは静かに答えになりました。後にこの若者は、お釈迦さまの弟子になったということです。

仏教では怒りの心を、「人を不幸にする最も恐ろしい心」と捉え、お釈迦さまも「怒りのせいで善いことをしなくなり悪いことをして皆から嫌われる。怒りは猛火よりも激しくすべてを焼き尽くす。」と説いておられます。そして怒りの心について、岩に刻んだような人(よく怒り、その怒りが刻み込まれたように消えることのない人)、砂に書いたような人(よく怒るが、その怒りが砂に書いたように長続きしない人)、水に書いたような人(水に文字を書いて流れて形にならないように、他人の悪口や不快な言葉を聞いても心にとめず、温和な気持ちでいる人)の三通りがあるとされており、なるべく三通りの「水に書いたような人」を目指しなさい、と教えられています。